



貝原守一医学振興財団会報

第16号



KAIBARA MORIKAZU MEDICAL SCIENCE PROMOTION FOUNDATION

貝原守一医学振興財団

会報 第16号

目 次

- 巻頭言 P 1
「先見の明」
天児和暢（理事 九州大学名誉教授）
- 平成 23 年度 研究助成金贈呈式記念写真 P 2
- 平成 23 年度 研究助成金贈呈式の挨拶 P 3
理事長 佐伯清美
- 平成 23 年度の研究助成候補者の選考について P 4
選考委員・橋場邦武（理事 長崎大学名誉教授）
- 研究論文選考にあたって P 6
「失敗を恐れずに」
選考委員・天児和暢（理事 九州大学名誉教授）
「助成選考にあたって」
選考委員・小野順子（福岡大学名誉教授）
- 平成 23 年度助成金贈呈者一覧 P 8
- 平成 23 年度助成受賞者の論文抄録 P 9
柴田健輔氏（九州大学 生体防御医学研究所 感染制御分野 助教）
倉原 琳氏（福岡大学 医学部生理学教室 講師）
石谷 太氏（九州大学 生体防御医学研究所 准教授）
今岡治樹氏（久留米大学医学部内科学講座呼吸器・神経・膠原病内科 助教）
- 貝原守一賞受賞者 P 13
田村徹郎氏（九州大学大学院医学系学府）
- 宮崎一郎奨励賞 P 14
平成 23 年度
工藤（戸畑）博恵氏（現 北海道大学水産科学研究院 博士研究員）
石井一成氏（福岡大学医学部 微生物・免疫学講座 講師）
- 財団の 23 年度行事 P 15
- 貝原守一遺稿より「戦争と医学」 P 17

～ 巻頭言 ～

「先見の明」



財団理事 九州大学名誉教授 天児 和暢

研究では研究機器の果たす役割は大きい。近代科学が進歩するにつれ研究機器も多様になりかつ精密な機器が使われる様になってきた。私が大学院に入った頃、よく使われていた研究機器は多機能光学顕微鏡と分光分析器程度で、定量実験などは研究者がピペットと試験管を握り自分で分析していた。その頃の高価で最先端の研究機器は超高速遠心機と電子顕微鏡であった。

九大に電子顕微鏡が設置されたのは戦後の昭和二十五年で、細菌学の戸田教授が働きかけ全学の設備として細菌学教室に設置された。これは九大のみならず西日本で最初に設置された機器であった。何故細菌学に最初に置かれたのか、電子顕微鏡が細菌やウイルスのような微細な物の構造を見るに優れていたことでもあろうが、このような高性能の装置の存在にいち早く気づきその性能を調べた研究者が在籍していた事も大きいであろう。その人が他ならぬ貝原守一氏であった。

電子顕微鏡は、昭和初期にドイツで開発され、研究に使用されるようになったが日本に入ってきたのは戦後である。しかし、貝原氏はこの機器の優秀さをいち早く認識しドイツでのその成果を日本語に訳し紹介している。

それは戦前の昭和14年である。その文には電顕を開発したドイツの研究者Ruskaにより撮影された細菌の電子顕微鏡写真も掲載されており、九大の関係者のみならず日本中の研究者に取っても最先端技術の紹介となった。その後日本は戦争に突入していったので、大学に顕微鏡を導入する状況には成らなかったが、このことが戦後いち早く電子顕微鏡を導入する原動力となった事は間違いない事である。

貝原先生は、この最先端の機器を使うことなくお亡くなりになったのが誠に残念な事であったであろうが、その先見の明は戦後九大が日本での電子顕微鏡で先駆的な地位を保てた大きな要因と成っている。



平成24年2月18日（福岡ガーデンパレスホテル）

平成23年度 貝原守一医学振興財団研究助成金贈呈式

平成23年度貝原守一医学振興財団研究助成金贈呈式の挨拶



一般財団法人貝原守一医学振興財団 理事長 佐伯 清美

平成23年度、貝原守一医学振興財団研究助成金贈呈式に受賞者の皆様、財団役職の皆様、公私ご多忙のなかを御出席いただき、式を開催出来ますことは誠に有り難く、篤くお礼を申し上げます。

多数の論文応募者の中から厳しい審査を経て、選ばれました四名に皆様、受賞まことにおめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。

平成4年より始めました当財団の研究論文助成金授与者は本年で80名になりました。この80名の研究者皆様の研究成果が、日本の医学は勿論、世界の医学の進歩発展に大きく寄与し貢献していることを確信し、今後も一層貢献してゆくことを期待いたしております。

本財団の設立目的であります「研究助成金授与により医学の進歩発展に寄与し、以って社会の福祉に貢献する」ということを立派に果たしているものと確信しております。

本日、研究助成金を受けられる四名の皆様、本日受けられる助成金を十分に活用していただき、優れた研究成果を上げられることを期待いたしております。

今回も、厳正公平な審査をしていただき、受賞者を決めていただきました選考委員の先生方に篤くお礼を申し上げます。

また、毎年滞りなく研究助成金授与が出来ますことは、担当理事の並々ならぬご尽力と各理事、役職皆様の力強いご助力と温かいご協力のお陰であり、この場をかりて心よりお礼申し上げます。

毎年優れた研究論文を提出して下さいます各大学や医学研究施設の皆様にも、お礼申し上げ、今後一層の御協力をお願い申し上げます。

終わりに、本日受賞の皆様を重ねてお喜びを申し上げ挨拶といたします。

貝原財団平成23年度研究助成選考過程について



選考委員・財団理事 長崎大学名誉教授 橋場 邦武

平成23年度貝原守一医学振興財団の研究助成には、九州大学8件、久留米大学1件、福岡大学3件の、合計12件の応募があった。産業医科大学および大学以外の研究機関からの応募はなかった。最近では、研究方法として分子生物学的方法、免疫学的方法、遺伝子学的方法などが共通して広く用いられるようになったこともあって、各教室間の研究分野の境界が重なることも多い。このため、応募者の研究分野を単純に分類することは困難であるが、今回は腫瘍、炎症、再生治療、細胞内シグナル伝達、幹細胞など、に関連する研究を課題として、歯学を含む種々の臨床講座、基礎講座などの研究者からの応募があった。

平成23年12月10日に、天児和暢(九州大学名誉教授)、小野順子(福岡大学名誉教授)、橋場邦武(長崎大学名誉教授)の3名の選考委員による最終選考委員会が開催された。佐伯清美財団理事長が同席され、その御指名によって、橋場が議事の進行を司会した。

選考の方法は例年と同様であるが、合同の選考委員会の開催に先立って、先ず第一段階として、3名の選考委員が、それぞれ独立して、応募書類によって、応募者の研究課題、研究目的、研究方法、これまでの研究歴、研究実績、添付された論文別冊、などを詳細に検討した。発表論文については、その数とその内容の評価のみではなく、応募者が論文執筆の筆頭者であるか共著者であるか、などととも、特に、論文掲載雑誌の国際的な評価の高さなどを考慮した。これらの諸点を総合して応募研究の独創性、科学性、将来性、実現可能性、などを評価し、原則として3段階の評点によって客観化した。

第二段階として、上記のように平成23年12月10日に開催した最終選考委員会において、3委員が予め行った第一段階の評価を持ち寄って、それを公表しあった上で、1課題ごとに意見を交換した。3人の委員の第一段階の評価は必ずしも一致しない点もあったので、十分な時間を用いて各選考委員が率直に意見を述べあって検討した結果、最終的には4名の受賞者を一致して推薦することができた。

受賞者と決定したのは、別表にも掲載されているごとく、九州大学柴田健輔氏、福岡大学倉原琳氏、九州大学石谷太氏、久留米大学今岡治樹氏、の4氏であるが、いずれも上述の種々の観点より検討して、今後に魅力ある具体的研究成果を期待できる研究助成応募と評価されて、受賞者として選出された。この委員会の決定は、佐伯理事長によってそのまま受理された。

九州大学生体防御医学研究所感染制御分野助教の柴田健輔氏のテーマは、「胸腺より生じ

る炎症性T細胞機能分化制御による新規治療法の開発」で、種々の疾患の病態形成に關与する IL-17 を産生する細胞が、胸腺の $\gamma\delta$ T細胞から機能分化する決定機構を解明することを目的としたもので、難治性感染症、腫瘍、自己免疫疾患、などの新規治療法の開発までを目標とする研究である。同氏はこれに關連する多くの研究を進めて、その成果を国際的一流誌の **Blood** などに論文として報告しており、今後の発展が期待できる。

福岡大学医学部生理学教室講師の倉原琳氏のテーマは、「筋線維芽細胞をターゲットとした腸管狭窄治療法の開発」で、難治性炎症性腸疾患において、炎症抑制の治療後に生じる線維化による腸狭窄の阻止を目的とする研究である。消化管の線維芽細胞において線維化に關わる機序を活性化する諸因子制御機構を解明し、炎症性腸疾患における腸狭窄の内科的治療法の開発までを目標としている。同氏は、基礎的研究を **Am J Physiol** などの国際的一流誌に報告もしており、研究者としての発展を期待できる。

九州大学生体防御医学研究所准教授の石谷太氏のテーマは、「小型魚類を利用した神経幹細胞の運命決定を担うシグナル制御機構の解明」で、神経幹細胞から適切な時期と場所に適切な種類の神経細胞を分化誘導する細胞内シグナルの動態を小型魚類ゼブラフィッシュの神経板をモデルに解析する研究である。非常に興味ある基礎的な重要課題であり、将来的には、再生医療の開発へ貢献することまでも目標としている。同氏は、研究成績の一部を、国際的に最高級の **Nature** 誌に報告している。九州大学「テニュアトラック制度」に応募採用されて、九州大学特任准教授となり、その活動が評価されて現在は研究所の独立准教授として研究に従事しており、研究者としての今後の発展が期待される。

久留米大学呼吸器・神経・膠原病内科学講座助教の今岡治樹氏のテーマは、「抗 IL-18 受容体抗体を用いた炎症性呼吸器疾患治療の研究」である。IL-18 は慢性閉塞性肺疾患の病態に重要な役割を果たしているが、同氏らが新たに樹立した IL-18 受容体に対する抗体を用いて IL-18 の機序の解明を進め、慢性閉塞性肺疾患の診断や治療法の選択への応用を目標としている。同氏は最近のカナダへの留学中にも筆頭者としての論文を数編報告しており、今後の研究の発展が期待できる。

若い研究者への研究助成は本財団設立の最も重要な目的であり、将来性豊かな研究者を助成対象として選出できたことは、選考委員としてもまことに喜ばしいことである。4名の受賞者の着実な研究成果に心から期待するものである。なお、今回の応募者の中には受賞者以外にも立派な研究者がおられたことを付記して、今回の財団研究助成への応募に対して感謝の意を表したい。

なお、4名の受賞者には、今回の研究課題に關係ある論文発表の際には、論文後記に本財団の助成を受けられたことを明記し、また、その論文別冊を必ず財団本部に必ず送付されることをお願いしたい。これは、本財団の客観的な貴重な財産となるものであり、また、今後の活動の最も大きな原動力ともなるものであるから、是非とも実行して頂きたいと思う。

「失敗を恐れずに」



選考委員・財団理事 九州大学名誉教授 天児 和暢

本年度は、12件の応募があった。応募数は例年よりは多少少なかったものの、内容的には優秀な研究が多かった。また、初めて歯学研究者からの複数の応募があった。残念ながら今回は受賞には至らなかったが、高齢化社会では口腔内医学や歯学関係の研究も重要性を増している事でもあり、研究の発展を期待したい。審査により選出されたのは、神経の発生、リンパ球の分化と作用、難病の治療法に関する4件の研究であった。

当然のことではあるが、助成の段階ではまだ研究の成果は出ていないが、審査はその成果を期待して決めたのであり、受賞者は、ぜひ目的とする成果を挙げるべく努力してほしい。

研究には失敗はつきものであるとよく言われる。しかし、これは視点を変えてみれば、失敗と言うべき事ではなく、予想とは違う結果になったと考えるべきであり、意外な結果とも考えられる。研究者にとっては新たな視点で研究を再検討する絶好の機会を与えられたと考えるべきであろう。人間の限られた経験と知識でなされた実験計画に、予想もしなかった方向を示したもので、むしろ喜ぶべき事である。失敗を恐れずにやり遂げてほしい。研究追求には、いかなる困難を乗り越えて行く休む事のない努力が必要である。研究助成はその様な研究者への応援のエールでもある

助成選考にあたって



選考委員・福岡大学名誉教授 小野 順子

今年度は応募数が12件であり、癌あるいは分化を取り扱ったテーマが少なかったことが応募数の減少に影響したと思われます。前年度から更に研鑽を積んで、引き続き応募された研究もあり、努力が窺われました。また永年取り組んで一定の成果が得られているテーマを、特定の疾患の治療法の開発に発展、応用しようとする研究が7件あり、これらの対象疾患が多岐にわたっていましたが、申請者の所属機関の広がりに関連していたと思われます。調査研究は2件で、調査規模や方法などに対する評価はあまり高くはありませんでしたが、今後応募件数が増えることも予想され、評価基準を検討する時期が来るでしょう。

以上のような状況であり、応募数は昨年と比し少なかったのですが、優れた内容のものが多く、選考には時間を要しました。結果として、基礎部門での高度かつ緻密な論理と実験によって構築された永年の研究をベースに、臨床への応用を試みた3件：胸腺での $\gamma\delta$ T細胞の機能分化制御機構に関して柴田健輔氏、TRPチャネルの機能制御から炎症性腸疾患の線維化機構を解明しようとする倉原 琳氏、ゼブラフィッシュ神経幹細胞の運命決定制御機構の解明に関して石谷 太氏が選考されました。今回唯一臨床教室での受賞となった今岡治樹氏は、教室のテーマであるIL-18受容体抗体を介した炎症性肺疾患の診断や治療選択の具体化が期待され、対象疾患の緊急性もあり、決定されました。

今回助成対象以外でも高い評価を受けた研究が多く、助成決定は紙一重の差でありました。今後も発展されて再度応募されることを期待しています。

平成23年度 研究助成金授与者

(順不同・敬称略)

授与者名	所属機関	研究内容
柴田 健輔 (シバタ ケンスケ)	九州大学生体防御医学研究所 感染制御分野 助教	胸腺より生じる炎症性 T 細胞機能 分化制御による新規治療法の開発
倉原 琳 (クラハラ リン)	福岡大学 医学部生理学教室 講師	筋線維芽細胞をターゲットとした 腸管狭窄治療法の開発
石谷 太 (イシタニ トオル)	九州大学生体防御医学研究所 准教授	小型魚類を利用した神経幹細胞の 運命決定を担うシグナル制御機構 の解明
今岡 治樹 (イマオカ ハルキ)	久留米大学医学部内科学講座 呼吸器神経・膠原病内科助教	抗 IL-18 受容体抗体を用いた炎 症性呼吸器疾患治療の研究

※平成24年度の募集について

平成24年度の研究助成論文募集は6月下旬に各大学宛に応募要領、申請申込書等をご案内いたします。



【 贈呈式 】

胸腺における炎症性T細胞機能分化制御機構の解明



九州大学生体防御医学研究所
感染制御分野 助教 柴田 健輔

腸管、肺、生殖器上皮内といった粘膜組織より侵入した病原体は、好中球やマクロファージ等の自然免疫担当細胞に直接認識され排除されるため、それらの感染局所への浸潤や機能制御機構の解明は重要である。我々は感染マウスモデルを用いた研究により、粘膜組織に常在する $\gamma\delta$ T細胞がIL-17やIFN- γ といった炎症性サイトカインを産生することで様々な病原体に対して自然免疫担当細胞の浸潤や機能を制御することで感染防御に働くことが明らかになっている(Dejima et al., 2011; Hiromatsu et al., 1992; Shibata et al., 2007; Tagawa et al., 2004)。また $\gamma\delta$ T細胞はIFN- γ やIL-17産生を介して抗腫瘍効果を示したり、局面によっては血管新生を促すことで腫瘍の浸潤に寄与する能力を有することがマウスおよびヒトの研究により明らかとなっている(Bonneville and Scotet, 2006; Gao et al., 2003; Takeuchi et al., 2011; Wakita et al., 2010)。さらに $\gamma\delta$ T細胞は多発性硬化症、リウマチ等の自己免疫疾患や脳梗塞の病態形成に関わることが近年明らかとなり(Ito et al., 2009; Jensen et al., 2008; Shichita et al., 2009)、そのような疾患においては主にIL-17を産生する $\gamma\delta$ T細胞が関与していた。このように $\gamma\delta$ T細胞は様々な疾患の病態形成に関与していることが明らかとなっているがその機能制御機構は不明であった。

近年我々は $\gamma\delta$ T細胞が外来抗原に暴露される前の胎生早期に胸腺においてIL-17産生細胞へと機能分化することを明らかにした(Shibata et al., 2008)。さらにIL-17産生細胞機能分化にはNotch-Hes1経路が必須であることを見出している(Shibata et al., 2011)。今後更に $\gamma\delta$ T細胞の胸腺における機能制御機構を明らかにすることで、それらの選択的機能制御による難治性感染症や腫瘍、自己免疫疾患・脳梗塞の治療法の開発につなげたいと考えている。

筋線維芽細胞をターゲットとした腸管狭窄治療法の開発



福岡大学 医学部 生理学
倉原 琳

クローン病 (CD) や潰瘍性大腸炎(UC)などの炎症性腸疾患(IBD)は、自己免疫異常に起因する難治性疾患である。IBD は、若年で発症し頑固な下痢や便秘を繰り返す経過を辿ることから、長年に亘って生活の質を劣化させる難治性の疾患として問題になっている。抗TNF α 抗体療法は炎症の抑制に顕著な効果を示すが、線維化による腸狭窄が大きな問題として残る。IBD 急性期の治療は潰瘍治癒を目指すのが、慢性期には狭窄(線維化)に対する治療が必要となり、現在は外科切除か内視鏡的バルーン拡張術が主な治療法である。従って、この線維化に対する薬物治療法の開発は重要な課題と考えられる。

線維化治療のターゲットである筋線維芽細胞は消化管粘膜上皮下の部分に分布し、その過剰反応が慢性腸病変の線維化に関わる。本研究では、最近 IBD の線維化進行過程における重要性が注目されている筋線維芽細胞の遊走・沈着と筋線維芽細胞からの線維化調節因子の放出に焦点をあて、TRP チャンネルによる Ca²⁺流入を介した転写因子 (NF κ B 系、calcineurin/NFAT 系、CaMK/CREB 系など) 制御が腸管炎症の進行や改善にどのように関わっているのか、分子生物学・免疫組織化学・生理学的手法を用いて探索する。予備実験の結果により腸管組織線維化調節のセンサー蛋白質と考えられる筋線維芽細胞 TRPC4, TRPC6 を標的として、筋線維芽細胞の増殖、遊走、炎症性サイトカイン産生、extracellular matrix 制御機構の解明とともに、腸狭窄の内科的治療法を探ることを目的とする。

本研究は、筋線維芽細胞がもたらす腸管炎症の増悪や治癒の両方向におけるシグナル伝達経路の解明に繋がり、将来 IBD 時の線維化治療に用いる新しい薬物のスクリーニングを行うにあたって重要なステップとなる。本邦において高い有病率を示す過敏性腸症候群も IBD と関連した病態である可能性を考えると、本研究の成果から極めて大きな社会的な波及効果が期待される。

小型魚類を利用した神経幹細胞の運命決定を担うシグナル制御機構の解明



九州大学 生体防御医学研究所
石谷 太

近年、神経組織の“もと”となる神経幹細胞を用いた再生医療は、脳梗塞や事故による中枢神経系の損傷の新たな治療法として注目を集めている。私たちは、神経幹細胞の運命決定を担う分子基盤を明らかにし、将来的な神経幹細胞を用いた医療技術の開発へ貢献することを目指している。

中枢神経系の構築過程においては、神経幹細胞は、適切な時期と場所において適切な種類の神経細胞を生み出す一方で、自身の未分化状態の維持も行っている。これまでに、Notch シグナルが神経幹細胞の未分化性維持において中心的な役割を担っており、神経幹細胞から神経細胞が生み出される際には Notch シグナルの低下の誘導が必須であることが知られている。

しかしながら、Notch シグナル低下を誘導する機構の分子実体の全貌は明らかにされていない。

また、脳の形成時においては Notch シグナルのみならず、Wnt シグナルや Shh シグナルも神経幹細胞の維持と増殖の促進に貢献することが知られているが、この過程において Notch・Wnt・Shh シグナルの三者がどのように分子レベルで協調しているのかはあまり調べられていない。私たちはこれまでに、小型魚類ゼブラフィッシュを活用し、上述の幹細胞運命決定シグナル群の機能と制御を解析する技術を独自に開発し、さらに「神経幹細胞運命決定における Notch・Wnt・Shh シグナルの新たな制御機構」を見いだしつつある (Nature Cell Biology 2005; Nature Cell Biology 2010; EMBO J 2012)。本研究では、これまでに得た知見と独自の開発手法を起点に、「神経細胞を生み出す Notch シグナル低下誘導機構」と「神経幹細胞における Notch・Wnt・Shh シグナルの協調機構」を解明する。これにより、神経幹細胞の運命決定を担う分子基盤に迫りたい。



抗 IL-18 受容体抗体を用いた炎症性呼吸器疾患治療の研究



久留米大学 医学部 内科学講座
呼吸器・神経・膠原病内科学部門 今岡 治樹

炎症性サイトカインである IL-18 は、呼吸器疾患、動脈硬化性疾患などの循環器疾患、潰瘍性大腸炎などの炎症性腸疾患、さらには関節リウマチ関連疾患症状の悪化に関与していることがすでに解明されている。

我々の研究室では、IL-18 を IL-2 とともに野生株マウスに連日投与する事で、単核球浸潤を中心とした致死性の急性間質性肺障害が発現し、その発現過程は NK 細胞に依存している事を発表した (Okamoto, Blood 2002)。そこで、肺特異的に IL-18 を強発現させ、さらに発現条件を調整する事で、間質性肺障害だけでなく、肺気腫病変を示すマウスモデルの作製に成功した (Hoshino, Am J Respir Crit Care Med 2007)。肺気腫病変マウスモデルは慢性閉塞性肺疾患 (Chronic Obstructive Pulmonary Disease; COPD)患者同様、体重減少、筋萎縮、骨粗鬆症、右心不全などの全身性の影響を認めていた。

また、臨床研究においては血清中の IL-18 値が重症及び最重症型の COPD 患者では、喫煙または非喫煙健常人と比べて、有意に増加していた。重症 COPD に対する外科的処置である肺容量減少術の際に採取した肺組織では、気管支や肺胞マクロファージ、肺胞上皮細胞で IL-18 リガンドの発現が増加している事を証明する事ができた (Imaoka, Eur Respir J. 2008)。また気管支喘息患者においても血清 IL-18 は、健常人と比べて有意に増加していた。

さらに、気管支喘息の病態の特徴である気道過敏性の指標である MCh PC₂₀ (provocative concentration of methacholine causing a 20 % fall in FEV₁)とも負の相関を示していた。喘息患者肺組織では、IL-18 が気道上皮細胞、気道平滑筋、IL-18 受容体が気道平滑筋に発現していた (Imaoka, Eur Respir J. 2011)。

この様に、IL-18 は様々な疾患を誘導因子し増悪因子になり得るサイトカインであると言える。よって IL-18 やその受容体をターゲットとした治療は COPD や気管支喘息に対する新規治療薬になり得ると考えられ、炎症性呼吸器疾患の新規治療に対する非常に重要な研究であると考えられる。

平成23年度 貝原守一賞 受賞者

貝原守一賞受賞者は下記のように決定し、平成23年10月15日開催の青藍会（九州大学大学院医学研究院細菌学分野同門会）集談会において授与されました。
受賞者の氏名、論文とその内容は以下に記す通りです。

平成23年度受賞者名（敬称略）

- ・田村 徹郎（九州大学大学院医学系学府 大学院博士課程4年）

研究内容

「高圧酸素の殺菌効果とそのメカニズムの解析」



貝原守一賞について

（青藍会）は、九州大学医学研究院細菌学教室の故戸田忠雄名誉教授が設立され、故貝原守一先生もその一員で助教授として活躍されていた。

貝原守一先生が亡くなられた後、奥様の芳子氏（初代理事長）が故人の遺志を継いで、平成3年に財団を設立され医学を志す若い研究者を助成する活動を始めた際、細菌学教室より研究奨励賞をと申し出でがあり、青藍会貝原守一賞として平成4年に発足した。

宮崎一郎奨励賞 受賞者

平成23年度の宮崎一郎奨励賞の受賞者は下記の通りです。

平成23年度受賞者名 (敬称略)

- ・工藤 (戸畑) 博恵 (現 北海道大学水産科学研究院 博士研究員)

研究内容

「線虫 *strongyloides ratti* 第3期幼虫の *invitro* 行動解析」

- ・石井 一成 (福岡大学医学部 微生物・免疫学講座 講師)

研究内容

「トキソプラズマ原虫に対する DNA ワクチンの開発」



宮崎一郎奨励賞について

宮崎一郎奨励賞は平成6年11月に創設され、貝原財団から九州大学医学部寄生虫学講座同門会 (会長 木附 徹雄) に寄付されており、この資金から福岡県内の寄生虫学研究の機関に所属する寄生虫学の研究者に研究目的達成の為、その一助となるよう助成を行っている。

奨励賞授与の基準や方法は九州大学医学部寄生虫学講座同門会で規定が定められている。

財団の主な会議及び事業報告

(1) 評議員会

開催年月日	開催場所	議案
第一回 平成23年 6月 11日	福岡ガーデンパレス ホテル	1、平成23年度事業計画並びに収支 予算案承認の件 2、その他

(2) 理事会

会議名及び開催年月日	開催場所	議案
定例理事会 平成23年 6月11日	福岡ガーデンパレス ホテル	(1) 平成22年度事業報告の件 (2) 平成22年度収支報告承認の件 (監査報告) (3) 平成23年度事業計画の件 (4) 平成23年度収支予算の件 (5) その他
臨時理事会 平成23年 9月 9日	財団事務局	財団事業の現況報告
臨時理事会 平成23年 9月22日	財団事務局	助成事業の内容について 助成金論文募集期間終了 応募件数12件
定例理事会 平成23年12月12日	財団事務局	H23年度研究助成金授与者決定の報告 及び承認の件
臨時理事会 平成23年12月16日	財団事務局	財団事業の現況報告
定例理事会 平成24年 3月30日	財団事務局	財団事業の現況報告 平成24年度事業計画 予算案について

(3) 助成事業

年 月 日	行 事
平成23年10月4日	貝原守一賞 青藍会・九州大学医学部細菌学教室同門会に研究費70万円を助成
平成23年10月4日	宮崎一郎奨励賞 九州大学医学部寄生虫学教室同門会に研究費30万円を助成
平成23年6月17日	平成23年度 研究助成論文応募要領送付 産業医科大、九州大学医学部、福岡大学医学部、福岡歯科大学 久留米大学医学部、九州がんセンター、九州歯科大学
平成23年12月10日	平成23年度 助成金授与論文選考委員会 (於：福岡ガーデンパレスホテル)
平成24年2月18日	平成23年度 助成金授与式開催 (於：福岡ガーデンパレスホテル) 授与者4名に助成

(4) 機関誌発行

年 月 日	行 事
平成23年7月22日	貝原守一医学振興財団会報（第15号）発行



【贈呈式の祝賀会】



昭和17年（1942）31歳

戦争と醫學

貝原守一

最後に、十六世紀第三回イタリア戦争の時、フランス軍の看護長格で従軍した床屋外科醫パレエは、これまで銃創が非常な毒性をもつてゐるものだと考へられて沸らした熱油を創口に注いで焼かれて居たのを、或る時油がなくなつたために、しかたなく緩和な軟膏だけで處置して置いた。ところがその結果は油で焼灼するよりも遙かに良好な成績だったので、其後パレエは熱油を用いることを極力排斥し、後になつてこれに就いての小著をあらはしてゐる。これは無腐的創傷の治療として醫學史上重要なことであり、更にパレエが止血の目的に行ふ焼灼法の代りに血管結紮法を思ひいついた動機にもなつたもので、有名な挿話である。

尚、更に世界大戦のとき—今回の事變でも報告されてゐるが—塹壕熱は交戦各國の軍隊を襲ひ大いに悩ましたが、既にドイツではこの發疹熱の媒介者が虱であるといふリケツツの發見を速やかに徹底させて、

虱退治のために周到な計画を行つて居り、そのためポーランドやロシヤ、セルビア等の避難民や捕虜が何よりも先ず裸にされ、髭を落とされ、髪は丸坊主にされて虱退治の對象とされたために、捕虜虐待などと騒いだといふことが傳えられて戦争にユーモアを添へてゐるが、吾々はいはこれ等の單なる挿話の中に戦争と醫學の問題に關する多數の示唆が含まれてゐることを充分洞察しなければならぬ。

九大新聞 昭和十三年十一月五日発行

前号に引続き「戦争と医学」（四回連載のうち最終回）を掲載します。

昭和十三年当時の九大新聞からの転載にあたり漢字及びかなづかいは出来る限り原文に忠実に掲載しました。

貝原守一医学振興財団
会報 第16号
2012年7月 発行

発行：一般財団法人貝原守一医学振興財団

事務局：〒811-1343 福岡県福岡市南区和田1-4-18

TEL: 092-512-8068 FAX: 092-512-8069

URL <http://www.kaibara-zaidan.or.jp>

E-Mail Info@kaibara-zaidan.or.jp